

夏季福音特別集会 第2回

試練・患難の中での戦い

2018年8月25日(京都KKRくに荘)

「はい、ありがとうございます。」人の前でハッキリと証しる キリスト直結 キリストの尊い犠牲が払われた 救いは神自らの故によりて 種時きの譬話 世の心労 神さまが主役 金持ちとラザロの譬話 患難と忍耐 キリストに対する「恩返し」 祈り

●「はい、ありがとうございます。」

「信仰」とか「キリスト教」は難しいとか、そんなふうに見える方が世の中にはたくさんいらっしゃる。もし、皆さんの中にもいらっしゃると思ったら、そんなことは全然ありません。キリストと本当に一つにしていたかどうかということだけなんです。キリストが主体なんです。キリストが、

「お前たちを救つてやるから、ついてこい」

「はい、ありがとうございます」

と。それ以外に何がありますかね。そうでしょ。こつちからは何も出ないんです。向こうから恵みがくだつてくる。

「具体的に十字架でお前のことは全部片づけたんだから、私の生命を受けろ」

「はい、ありがとうございます」

と。もう「はい、ありがとうございます」以外に何かあるんですか。そういう次元に生きていていただきたいんです。

ルカ伝9章の、

「<sup>20</sup>イエス言い給う『なんじらは我を誰と言うか』ペテロ答えて言う『神のキ

リストなり』<sup>21</sup>イエス彼らを戒めて、之を誰にも告げぬように命じ、

イエスは「汝ら我を誰と言うか」と。ペテロは「神のキリストなり」と。その告白に対して、「誰にも言うな」と仰つたんです、神秘だからと。

かつ言い給う <sup>22</sup>『人の子は必ず多くの苦難をうけ、

神のキリストがそんな多くの苦しみをうけ無惨な死に方をするなんて、ペテロなんか全然思つてない。だから、「そんなことがあつてはいけません」と、別なところに書いてある。ペテロに「サタンよ、引き下がれ！」とキリストはお叱りになっています。そのくらい、人の思いと神の思いは違う。ここでは「サタンよ、さがれ！」という場面は出てきませんけれども。

<sup>22</sup>『人の子は必ず多くの苦難をうけ、長老・祭司長・学者らに棄てられ、か



つ殺され、三日めに甦よみがえるべし』<sup>23</sup>また一同の者に言いたもう『人もし我に  
従い来らんと思わば、己をすて、日々おのが十字架を負いて我に従え。

「己をすて」ときたですよ。「己を惜おしめ」とか、「自分は幸せになりたい」とか、そんなことは書いてない。「己をすて、我に従え」と、命懸けですよ。いい加減なものではないんです、キリストの世界は。

己をすて、日々おのが十字架を負いて我に従え。<sup>24</sup>己が生命を救わんと思う者は之を失い、

みんな己が生命を救わんと思つてキリストのところへ来る。でもそんなんじゃないよと。

「自分じゃないよ。神さまが第一なんだ。まず神の国と神の義を求めよ」

とキリストは仰つた。そうすれば、必要なものはすべて添えて与えられると。神さまが主権者である。神さまがなさりたいようになさる。その神さまをイエスは顕しておられる。だから、イエスさまがご配慮くださるので、こつちはイエスさまの御意を求めていく。

「自分のことなんか放つておけ。それはあなたのすることではない。あなたは私を求めてこい。神の国とその義を求めてこい。そうしたら、必要なものはすべて添えて与えられる。結果として与えられる」

と。ところが、人はみな自分の幸せ、自分の欲しいもの、そればかりを求めていく。そして、叶えられたら、

「ああ、きかれた。うれしい、うれしい」

と。そんなこととは全然次元がちがいます、キリストの仰つていることは。それをやはりクリスチャンはハッキリ言わないといけない。クリスチャンが今は無力です、ハッキリ言つて。迫力を感じないでしょ。死んでみたい。御霊が無いからです。お魚でも生きのいいお魚は目が黒々しているが、目が死んでいるような、そういうクリスチャンが何人おうとそんなことは全然——統計の上で何パーセントであろうと——関係ない。

「芥子種からしだね一粒の信、これが大事だ」

とキリストは言われた。キリストの言葉はいつも極限的です。小池先生はよく仰つた、

「水を割らないでキリストは仰つている。それをしかと受けとつていけ」

と。だから、ここでも、「お前たちを幸せにしてやる」なんて、何も書いてない。

我に従い来らんと思わば、己をすて、日々おのが十字架を負いて我に従え。

と。おまけに、

己が生命を救わんと思う者は之を失い、我がために己が生命を失うその人は之を救わん。

キリストのために自分の命を犠牲にしてかかってくる者、捨ててかかる者、その者が本当の生命をいただく。永遠の生命をいただく。キリストと同質の生命をいただく。だから、

<sup>25</sup>人、全世界をもうくとも



世の中に金持ちがいる。特にアメリカなんて凄いお金持ちと貧乏人との差がひどいようですね。1%の人間のところ富が99%集まっているとか、そんなことが言われます。トランプさんみたいな金持ちらしいけれども、たとえそんな全世界をもうけても、

己をうしない己を損せば、何の益あらんや。26 我と我が言とを恥ずる者をば、  
人の子もまた己と父と聖なる御使たちとの栄光をもて来らん時に恥ずべし」  
(ルカ9・20〜26)

「私と私の言葉を恥じる者を私もまた神さまの前で知らんと言つよ」  
と。栄光の姿でキリストが現れてくださる時に、

「私はあなたのお弟子さんです」  
と言つても、

「そんなものは知らんよ」  
と。どこまでキリストのために傷ついて、キリストに命を献げて生き抜くか。それをしないクリスチャンはクリスチャンではない。讚美歌の331番の、

「主にのみ十字架を 負わせまつり、  
われ知らずがおに あるべきかは。

この歌の通りですよ。主にのみ十字架を負わせまつり、我は知らん顔でよいのかねと。

十字架を負いにし 聖徒たちの  
み国によろこぶ さちやいかに。

十字架を負った聖徒たちは殉教しました。昔は迫害がひどかった。でも、御国で喜んで、輝いている。その幸いが本当の幸いだ。

「わがために誇られなば幸いなり、喜べ喜べ」

とキリストは言われたでしょ。だから、

わが身もいさみて 十字架を負い、  
死にいたるまでも 従いまつらん。

と。いわゆるこの世的な「幸せを保証してあげる」なんてどこにも書いてないですよ。

「この世は悪しき世である、神に逆らう世である。神と富とみとに兼ね仕うること  
あたわず」

という。この世は「富」で表せられている。神はその反対です。

この世の禍幸まがひあち いかにもあれ、

さかえのかむりは 十字架にあり」

この世で幸せである、不幸である、そんなことはどうでもいい。十字架の大勝利です。そこに徹してください。本当にパウロはそこに徹しましたでしょ。パウロ書簡を読んで、

「ああ、私はパウロと同じ気持ちです。パウロさん、うれしいです。あれだけの苦難をぐぐりぬけて、よくぞ伝道してくださいました。ありがとうございます」



と。そんなお気持ちで皆さん、パウロ書簡を読みますか。コリント書なんかでも、

「私の出逢った災難はこうだった。一昼夜海に漂った」

とか、いろんなことが書いてあるでしょ。それをくぐりぬけて、なおパウロはキリストの証しのために身を献げていった。それに本当に共感して——時代は二千年近く隔たつていますが——でも、質的には同じなんだと。そういう気構えで聖書にぶつかっていかないと、読んだことになりませんよ。読んだら、もうその次元に入れていただいて、そこで共感共鳴して、

「パウロさん、ありがとうございます。現代にパウロさんが現れてきて、我々を助けてね。イ

エスさま、助けて」

と、そういう読み方をしていかないと。

「二日に聖書を何頁読んだらいいでしょうか」

なんていうレベルではない。

「わが言は靈なり生命なり」

と、ヨハネ伝に出てくるでしょ。

「我をくらえ、我を飲め。人を活かすものは靈であつて、肉は役に立たない」

と。「肉」というのは人間的なものです。「靈」というのは神さまの次元の、そういった生命でしょ。

「私の語った言は靈であり、生命である」

と。弟子ですら、それを「聞いてられない」と去つて行つたと書いてある。ヨハネ伝6章

63節。キリストはペテロに、

「お前も去るか」

「とんでもないです、あなたをおいて他にどこへ行きましょうか」

と答えた。さすがペテロですよ。ああいう場面を皆さん、自分のものとして本当に受けとつて、イエスさまと問答して、そこでイエスさまとお話しているような、そんな気持ちで読んでいただきたい。昔の話ではない。今なんだと。今そこに主は立つておられる。主は語りかけてくださっている。

「我をくらえ、我を飲め！」

と。

「はい、ありがとうございます。あなたにかぶりついていいんですね」

「ああ、かぶりつけ」

と。そんな気構えで、現在化していくんです。過去を現在に引っぱりこむ。現在は上から愛が降り注がれている。将来の希望を引き寄せる。そういった現在の中に、過去・現在・未来が全部こもっている。それを可能にしてくださるのが御霊なんです。だから、

「聖霊なき者はクリスチャンでない」



というのはその通りなんです。御霊がすべてを教え給う。学問のあるなしとか、経験が豊かとか、そんなことではない。キリスト、御霊のキリスト、それをうちにいただいているか、そのお方と日々歩んでいるか。本当に実生活の毎日の中に福音が生命いのちしていなかったら、クリスチャンでないですよ。特別集会だけのクリスチャンなんて、そんなものは要らんですよ、本当のところ。

むしろ、あの夏の甲子園です。日頃の練習の成果を甲子園で出している。日頃の練習の成果を甲子園でいかに出すか。それに高校球児たちはもう命を賭けている。あの熱心さに負けてはいけませんよ、我々の甲子園は特別集会ですから。

だから、今年準備が足らんかった方は来年をめざしてください。ただし、来年あるかどうかはわかりません。明日のことは誰にもわからない。それが終末というものなんです。

「明日にも終わりが来るかもしれない。今、あなたは大丈夫か？」

と、それを問いかけられている。キリストが、

「時は満ちた、神の国は近づいた。今、心を翻して、福音体である私を受けとれ」

と仰った御言は今も響いているんです。だから、

「今年はこちらよつといろいろ忙しいから、また来年にしましょう」

これは絶対ダメです。よく小池先生は言われたですよ、

「万難を排して来なさい。お金がない人は歩いて来なさい」

なんて。そのくらいの気構えで来いということです。まあ烈々たる気魄でしたよね、先生は。あの気魄たるやもの凄かった。それを受けとらないと。本当に凄かったよな、先生の講筵というの。グツとにらみつけたら、やはり聖霊が臨んでおられるから、権威があった。そんなことで、私はちよつと晩年の小池先生に似てきたのかもしれないけれども。それは私のせいではない。上から小池先生が、

「がんばれ、奥田。お前はわしの跡取りだ」

とか言ってる。そうでしょ。キリスト召団は、やはり私は小池先生の直系ですよ。肉的に別ですよ、肉の次元ではない。霊の次元で、その霊統を引き継いでいると私は思っている。だから、私はあえて

「今回の特別集会も、京都キリスト召団の夏の合宿の集会という性格のもので、他の召団の方々は友情参加してください」

と書いた。それはそれぞれの召団がキリスト直結——なにも小池先生を媒介としないでもいい——キリスト直結で歩んでおられる。それを大事にしたい。それぞれが自分の足で立って、キリストだけを、聖霊だけを頼りにして歩んでおられる。それを大事にしたい。しかし、それぞれの召団が何かそういうプログラムを組んでやられるのなら、友情参加します。それが5月に裾野召団と新宿集会の共同主催で福音セミナーをやっておられるので、我々京都は友情参加している。でも、参加した以上はそんな区別はありません。一つです。でも、



立場としてはそういう気持ちなんです。だから、今回も私はわざわざ、

「京都キリスト召団の特別集会です。他召団の方は友情参加してください」

と、そういうふう呼びかけた。その気持ちを皆さん、受けとってほしい。ということとは、京都召団の方々はそのだけの気魄でこの特別集会を備えてないと、友情参加してくださいっている方のご友情に申し訳ないですよ。

私は何事にもそこまでの真剣さが大事だと思う。キリストは命を捨ててくださいったんです。キリストは命を賭けてくださった。ご自分に何の理由もない。ただ我々に生命を与えるために、キリストは生命を投げ出してくださいった。そのご愛に報いる道、これは自分を捨ててかかるよりじゃないですか。キリストにだけ生命を捨てさせておいて、こっちはいい汁だけを吸っている、そんなのではない。喜びも苦しみも共にする。それが本当の愛の関係でしょ。

だから、義というものが立っている。それから愛です。義と愛が見事にミックスされている。それがイエス・キリストの福音の中味です。しかも、終末は近いという。

「明日はないよ、今日だよ、今日よ」

と。そういう迫りをもって我々を包んでいてくださる。そういう福音というもの。そんなふうを受けとっている。

### ●人の前でハッキリと証しろ

「人もし我に従い来らんと**思**わば、己をすて、日々おのが十字架を負いて我に従え」

日々なんです。他の福音書で「日々」が抜けているところがあるので、それでこのルカ伝を選んだ。この箇所は他の福音書にも出てきますけれども、この「日々」というのが入っているのはルカ伝です。

日々おのが十字架を負いて我に従え。<sup>24</sup>己が生命を救わんと思う者は之を失い、我がために己が生命を失うその人は之を救わん。<sup>25</sup>人、全世界をもうくとも己をうしない己を損せば、何の益あらんや。<sup>26</sup>我と我が言とを恥ずる者をば、人の子もまた己と父と聖なる御使たちとの栄光をもて来らん時に恥ずべし。

これは、

「人の前でハッキリと証しろ」<sup>あかし</sup>

ということなんです。

「私のような者が、私はクリスチャンですと言ったらキリストの名折れになる」

なんて、そんな遠慮は要りませんよ、皆さん。ハッキリと、

「私はクリスチャンです」



と言う。

「へエ、お前みたいなやつが？」

「そう、あんたからお前みたいなのやつと言われるこの私がキリストに救われて、変貌している。わがうちにいらつしやるキリストが、あなたは見えなくてしょうね。仕方がないですよ。でも、私は何者でもない。キリストが光ってござる。それが見えないんですか？」

と。それだけの気魄というか。尊い存在なんです、キリストが宿っておられるんだもの。そうでしょ。「人権」だとか、「人格尊重」とかいろんなことを言いますが、私は、キリストが宿っておられるそのお方、一人ひとりの中にキリストという生命が宿っているその一人ひとり、これはもう神の器です。神の子なんです。神の子にさせていただいたんです。それに誇りを持たなければいけません。そして、告白しないといけません。人の前でもっとも告白してほしい。

「お前みたいなやつが？」

「そうだよ、お前みたいなのやつがと言われるその私の中にキリストが光っていらつしやる。ダメだから余計にキリストは顧みてくださっている。自分を宣伝しない。わがうちにあるキリストを宣伝したい。あなたは大丈夫なんですか？」

と、逆に逆襲する。

「あなたは、今ここで即座に雷に撃たれて死んだ時に、行き先が決まっていますか。私は予約してあるんですよ、もうちゃんと特等席が予約されている。だから、いつだって、アーメン、ハレルヤで、いつでも天に昇っていけるんですよ。あなたは大丈夫ですか？」

と、逆にそのぐらい言っておやっつけてくださいな。だいたい、ご年配の方が多いでしょ。つきあっているのもご年配が多いわけでしょ。そうしたら、

「あなたは行き先が決まっていますか？」

と。大学生なら、「就職決まっていますか。これからの人生、長いあいだ働く場所がありますか」と聞く。あなた方はこれから就職するわけではない。そうすると、

「行く場所が決まっていますか？」

「いや、金はなんぼ払ったらいんですか？」

「それはでっかい金を払わなければ特等席に入れてもらえないよ」

「私は貧乏なんです」

「キリストが代わりに金を払ってくれたんだ」

と。少なくとも、

「我と我が言とを恥ずる者をば、私も恥じる」

と言っておられるこの言葉。クリスチャンは大胆にキリストを告白して、人からバカにさ



れようが、罵られようが、それをあえて受けとめるといふ、その傷を負う、そういう覚悟がなかったら、クリスチャンではないですよ。キリストにだけ十字架を負わせて、

「主にのみ十字架を負わせまつり、われ知らずがおにるべきかは」と。そんな冷たい弟子では困ります。ペテロも、

「先生と一緒なら死にます!」

と言ったけれども、逃げてしまった。これは弱かった。聖霊が来てないから。最後のお祈りの時でもみんな寝ていた。キリストは一生懸命祈っておられた。

「額から落ちる汗は血の雫のごとし」

と書いてある。

「天使が現れてキリストを助けた。弟子たちは寝てた」

と書いてある。

「心は熱すれど、肉体は弱きなり」

と。そうでしょ。それが普通の人間なんです。でもそういう、「心は熱すれど、肉体は弱きなり」というやつをひっくり返してくださったのが聖霊なんです。だから、聖霊がくだつてこないと、弟子たちは本当の弟子ではなかった。キリストはちゃんとそれを見ぬいておられるから、

「鶏が鳴く前に、あなたは私を三度知らんと言うよ」

と、キリストはハッキリとペテロに言われた。

「でも、お前の信仰がなくならないように、私は祈った。お前が立ち直ったら、

ほかのやつを力づけてやってくれ」

と。やはり、弟子たちのトップはペテロだということを知り、キリストは認めておられた。

まあ本当にそういうことから、福音書というのは実に生き活きと現代的に迫ってくるんですよ、自分の中に。そういう読み方をぜひしてください。遠い過去のはなしではない。今、今生きているドラマだと。

ヨハネ伝はキリストとの対話が多いですね。その中に自分が躍りこんで、

「はい、主さま」

と言う。よく小池先生は、マタイは言葉の福音書といわれた。マルコは行為の福音書。「直ちに、直ちに」と。ルカは心、ハート。それに対して、ヨハネは霊。こんなふうに先生は特色付けられたけれども、ヨハネ伝を見てたら、ものすごくキリストの言葉がジャンジャン出てきていてはいませんか。

「初めに言いきり」

ということから始まって、キリストの御言がヨハネ伝はすごく出てきてますよ。あれを全部いただきたい、

「はい、主さま、ありがとうございます。これいただきました。ありがとうございます」





ます」  
と。私はいつも聖書を読んだら、「ありがとうございます」とキリストにお礼申しあげているんです。

### ●キリスト直結

今回、私はさかんに「終末の迫りの中で」ということを言いました。

「終末の迫りの中で福音は語られている」

と。「終末の迫りの中で」ということと同時に、霊的な次元、「霊」の次元——この世の肉の次元ではない——キリストが語り、パウロが語り、聖書が、少なくとも新約聖書が我々に突きつけている現実、次元というのは天の次元である。この世のものではない。だから、

「人新たに生まれずば、それを受けとることができない。肉なる次元で霊なるものを受けとれない」

と。我々を霊の次元に引き上げるために、キリストは十字架で我々の肉を片づけてくださったわけですよ。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず。キリストわがうちにありて生き給うなり」

という。よく藤井武先生がお弟子さんに、

「あなた、死んでいますか？」

と聞かれたそうです。

「はい、十字架で死んでいます。われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

と。そういう答えをきくと期待しておられたんでしょう。お弟子さんがどう答えたかは小池先生から聞きませんでしたけれども。「死んでいますか？」と聞かれたそうです。私は、

「はい、生きてます。御霊のキリストと一緒に生きています」

「死んでないの？」

「いや、死はとづくに経過しました」

と。そこからしかスタートできてません、私は。十字架で古い私は片づけられた。そこから私の新しい生命が始まりました。

「日々生きています。御霊のキリストと一緒に生きています」

と、そういうふうになら答えたいですね。小池先生は、

「内村・藤井は素晴らしかったけれども、御霊の次元からは遠かった」

ということをおっしゃっていました。それを突破したのが小池先生だったのだから。やはり、それぞれ順序があるんです。アブラハムからずっとモーセを通して、イエスに来て、イエスからまたパウロに行つてというふうの流れがあります。そのように、日本のすごい



った無教会の先生方の場合も、内村・藤井、そこから小池先生に来て、突破があつて、そして我々につながっている。

けれども、私は無教会だからどうだと、そんなことは全然考えません。キリストが大事です。御霊のキリストが大事なんです。福音書に証しされているこのキリストがすべてです。だから、「無教会か、教会か」とか、「カトリックか、プロテスタントか」とか、そんなことは全然問題じゃない、そんな次元ではない。

### 「キリスト直結」

と、よく先生は言いましたね。キリスト直結。一人びとりがキリスト直結。小池を通じてのキリストではないですよ、皆さん。

特に、これは新宿集会の方々に私は申し上げたい。やはり先生がでかすぎますから、どうしても小池というものが媒介になつてしかキリストにつながらない。そうではない。小池をはずして、キリスト直結。小池先生はそのお手伝いをしているだけ。それは東京の方々、先生を尊敬するあまり、小池が表に出てきてはまずいんです。直結です。それなら先生は喜んでいい。

「そうだよ、キリスト直結なんだ。それを私は叫んできたんだ。それで行きたまえ。天からバックアップするよ」

と。私は京都ですから、横から見ているような感じがありますね。東京へ行けば、その中に溶け込みますけれども。日頃は京都から東京を見えます。そのときに、ぜひ、そうやって先生の本当の志を受け継いで、一人びとりが御霊のクリスチャンとして、

「私を見た者は、キリストを見たんですよ」

と、そういうことをハッキリ告白する。その告白をしたら、キリストは黙っておられない、放っておかれない。「お前みたいなやつが」と人が言ったら、キリストは、

「おれの可愛い子どもをいじめたら、承知せんぞ！」

という気魄で守ってくださいるよ(笑)。そうですよ。

まず、告白しないとダメ。キリストを告白する。それが、

「我とわが言を恥じる者を、私も知らんと言うよ」

と書いてあるでしょ、ここに。他のいろんなところに出て来てますよ。キリストが、

「人の前でハッキリ告白しなさい」

と。ヨハネ伝では、「憎まれる」と書いてある。

「私の名のゆえにあなた方は憎まれる。あなた方が憎まれる前に、まず私が憎まれたことをよく知ってほしい」

と、ヨハネ伝15章に出てきたでしょ。だから、この世とキリストの次元は合わないんです。水と油です。それを自覚しておかないと。家庭の中で一人がクリスチャンで生まれたら、必ずお家騒動が起ります。それをサポートする側と反対する側で。五人おれば三人と二



人とか、嫁と姑とか。ちゃんとキリストは言っておられるもの。

「我は火を地に投ぜんために来たれり。この火既に燃えたらんには我なにをか望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。」

血のバプテスマ、十字架です。そして、

私は平和をもたらすために来たのではない。争いである。分争である。五人の家族があれば三人と二人が互いに争う」

とハッキリ預言しておられるでしょ。だから、クリスチャンになるには——天国へ行ったらもうクリスチャンばかりですから、いいんですけれども——この世でクリスチャンになるというのは、敵を作るといふことなんです。憎まれるといふこと。へんな妥協はしない。まあ昔は殉教という、ひどい迫害があつたでしょ。今は迫害がありません。そのかわり眠っています、クリスチャンは。迫害があるところでは燃えます。でも迫害がなくなつたら、眠っています。サタンが喜んでます。それが現代じゃないでしょうかね。けれども、燃えるというのは感情的に燃えるのではない。感情的にワッショイ、ワッショイやつたつてダメなんです。御霊が宿りたもうて、御霊が祈らしめてくださつて、

「御霊言ひ難き呻きをもて執り成したもう」とあります。そういう世界だと思います。

### ●キリストの尊い犠牲が払われた

私がちよつとメモしてきたことがあります、特別集會に臨む心構えといふことで、「全回を貫く前提となるもの」として、「終末の迫りの中で」といふことが一つです。終末といふのはこの世の終わりであると同時に、一人ひとりの人生の終わり、この二重の意味をもっています。この世が終わるといふ意味で、

「世の終わりは近い」

という面と、皆さんお一人一人の人生が実は生まれた時から終末に向かっている。

「正月は冥土めいどの旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」

と一休さんが言いましたね。オギャーと生まれたとたんにもう死に向かつて人間は歩いていくわけです。でも、キリストが宿られると、死はふつとんでいます。新しい生命に変貌するんですからね。

だから、終末はこの世の終わりであると同時に、一人ひとりの人生の終わりである。しかし、その迫りの中で、その緊張感の中でイエスの言葉を受けとつていく。そうでないと、的外れになります。特別集會は人間が企画している。しかし、人間が企画しているけれども、私が今申したような心根で、この集會をやる。

「主さま、どうぞ、ご臨在ください。お願いします」

といったら、その御霊の主はご臨在くださつて、我々の願い以上のことをそこに成就して



くださる。だから、

「特別集会は、来年あるから、今年は忙しいから、ちよつとやめておこう」

これは絶対ダメです。今年行けるなら、まず万難を排して行く。来年あると思うなど。そういう気魄が大事なんです。

それからもうひとつ大事なこと。福音は——我々からみたら救いということですが——それはイエス・キリストの生命という代償を払って賜ったものである、ということ。お釈迦さんの世界は犠牲がありませんね、まあ私の知るところでは。でも、キリストの世界は、キリストの尊い犠牲が払われている。

「あなた方は代価をもって買い取られたんだ」

と、パウロはコリント書の中で言っています。「代価をもて買い取る」なんて、あまりああい言葉は好きではないけれども、言わんとするのは、

「キリストという尊い犠牲が支払われて、そしてあなたの生命がある。それを夢忘れるな」

ということ。です。

キリストという方は祈っていれば直ちに天に昇ってしまうお方でしょ。眩まばゆくなってスーッと天に昇っていく。そのお方が敢えて無惨な十字架の死をとげてくださいったということ。我々もしキリストの十字架がなかったら、みんな地獄ひつじょう必定です。誰一人、神の前に義とせられるような人間はいない。神よりも自分を大事にするという、これが「罪びと」です。

キリストは神さまだけだった。

「神さま、あなただけです」

と。それも「神さま」とは言わない。「父よ」と言われた。本当に一つに溶け込んでいた。

「あなたの御意だけを、私を通して、この地上に現してください」

という。

「御意みこころが天に成る如く地にも成させたまえ」

というあの祈りは、

「この私を通して、あなたのご愛が、あなたの聖なる御意がこの地に現実化します

ように、私をお用いください」

という、投げ出した祈りです。そして、キリストはご自分は何も理由がないのに、ゲッセマネで祈っておられたら、

「お前は十字架にかかって死んでほしい」

と、無茶苦茶な要求を神さまはなさった。しかも、父なる神さまがなさっているということとは、神さまが苦しんでおられるはずですね。自分のあれだけの孝行息子を犠牲にして地獄へ突き落とすという、そんなことを平然と喜んでやる父親なんてこの世にいないはずでしょ。キリストは、



「それ以外に道がないんでしょうか。あなたは全知全能のお方です。なにも私があるから棄てられて地獄に落ちなくても、彼らを天国人にしてやる道はないんですか。全知全能のあなたでしょ」

「いや、ダメなんだ。お前に犠牲になつてほしい。それしかないだよ」

と。キリストも苦しまれたかもしらんけれども、それ以上に神さまが苦しんでおられるはずです。そうでしょ。しかし、それしかないよ。

「はい、わかりました。御意に従います」

決然と十字架への道、ゴルゴタの道を歩んで行かれた。ああいう姿。そして、今までさんざんお世話になつた群衆たちが煽動されて、

「バラバをゆるせ、バラバをゆるせ。イエスを十字架につけろ！」

とやっています。その恩知らずな群衆。我々だつてその中に居たら、同じようなことをやっているかもしれないよ。それに対して、

「父よ、彼らをゆるしてやってください。彼らは自分で何をしているかわからない、わきまもない子どもたちなんです」

と言つて、執り成された。そして最後は、

「わがこと終わりぬ。わが霊を御手にゆだねます」

と。その姿を見ていた百卒長が非常に心をうたれたでしょ。

「この人はまことに義人であつた」

と。ユダヤ人たちはそんなことは言いません。この百卒長は「この人はまことに義人であつた」と非常に心をうたれた。女性たちはイエスを慕っていますから、亡骸なきがらを引きとるといふ場面が出てきます。イエスがそうやって生命を棄てておられるから、

「私に従つてきたいと思うなら、己をすて、日々おのが十字架を負いて我に従

え。己が生命を救わんと思う者は之を失い、我がために己が生命を失うその

人は之を救わん」(ルカ9・23〜24)

こういう言葉を本当にリアルなものとして受けとつていく。いわゆる

「クリスチャンになつたら、この世的な幸せが訪れますよ」

なんてことはありませんから。たとえ訪れても、それは恵みとして感謝してお受けになればいい。でも、それを求めたらダメ、幸福を求めたらダメなんです。自分を献げていけば、上から与えられるものが、この世の禍幸まがさち——禍は不幸、幸は幸い——

「禍幸、どちらであつても結構です。あなたと運命共同体。そのようにして私は行きます」

という、これが本当の弟子ではないでしょうか。

「イエスさま、あなただけ苦しんでください。私はいいところだけでもらいます」  
そんな身勝手な、そんなことはゆるされませんでしょ。



でも、こういうことを宣言されてから

「六日後に、イエスは眩い姿に輝かれた」

と出てくる。だから、十字架のことを予告されて、それから六日後に山上で変貌された。モーセとエリヤが現れた。このドラマ。そこにペテロたちは居合わせたわけですよ。

### ●救いは神自らの故によりて

それからもう一つ私がメモしてきましたのは、「救い」というのは、人間は願っているんですよ。でも、人間の思いとは無関係に、神ご自身が我々を救うという、そういう意志を持っておられるということです。これはイザヤ書に出てきます。

「[C]自身のために人の罪を消す。雲散霧消させる」

とハッキリ、イザヤ書に書いてます。イザヤ書43章、

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此<sup>かく</sup>いい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり。汝はわが有<sup>もの</sup>なり。なんじ水中<sup>みずのなか</sup>をすぐるときは我ともにあらん。河のなかを過ぐるときは水なんじの上にあふれじ。なんじ火中<sup>ひのなか</sup>をゆくとき焚<sup>やか</sup>るることなく火焰<sup>ほのお</sup>もまた燃えつかじ。我はエホバなんじの神イスラエルの聖者<sup>すけいぬし</sup>なんじの救主<sup>すくいぬし</sup>なり。…… 7……我かれらをわが栄光のために創造せり。われ曩<sup>むかし</sup>にこれを造りかつ成しおわれり。

こういう預言の言葉があります。そしてもう少し先にいきますと、

……21この民はわが頌美<sup>ほまれ</sup>をのべしめんとして我おのれのために造れるなり」(イザヤ43・1〜21)

と。神さまが主役なんです。神さまはご自分の栄光のためにイスラエルの民を導き、御業を現しておられる。今度は我々は、キリストによって旧い我は葬り去られて、新しく生まれました。それは神の栄光を現すための器として新しく生まれたんです。

「旧<sup>ふる</sup>きは過ぎ去った。視よ、一切は新しくなりたり」

と。その我々はもはや自分のために生きない。神の栄光のため、キリストの栄光のため、それに自分を捧げて生きる。そういう生き方。旧き我はもう死んでます。そこに徹底していつていただきたい。

イザヤ書44章21節、

「21ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ。汝はわが僕<sup>しもべ</sup>なり、我なんじを造れり、なんじわが僕なり、イスラエルよ我はなんじを忘れじ。22我なんじの愆<sup>とが</sup>を雲のごとく消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり。なんじ我にかえれ、我なんじを贖いたればなり」(イザヤ44・21〜22)

神さまの方で先に、



「罪も愆も全部、雲散霧消させた。私が既に成し遂げた。だから帰ってこい」  
と。「お前が帰ってきたらこれこれのことをしてやる」とは言っていない。

「私の方が先にやった。既成事実をつくりあげた。だから、安心して帰ってきなさい」  
と。神の御業なんです。救いは神の御業です。神ご自身のゆえに我々を救いあげてください。創造主なる方。素晴らしいものに創りあげられたんでしようけれども、背いた。しかし、その背いた人間を救いあげるのに、ご自分の方でちゃんとなしとげて、

「贖い終わった。だから、帰ってこい」

「我なんじの愆を雲のごとく消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり」

と。キリストが全部これを背負われたんです。キリストの十字架ぬきでそれが起こったら、それはもつともつとうれしいかもしらんけれども、そうはいかなかった。キリストが全部それを引き受けられた。だから、帰ってらっしゃいと。

「なんじ我にかえれ、我なんじを贖いたればなり」

と。それがキリストによつて贖いたればなりと。

「<sup>23</sup>天よ、うた歌え。エホバこのことを成したまえり。下なる地よよばわれ、もろもろの山よ、林およびその中のもろもろ木よ、声を発ちて歌うべし。

と。人間が叫んでくれないから、天地に向かつて、地よ山よ木々よ大空よ、讃えろ。もう人間どもはいかん。人間どもは全然わかってない。だから、もうそんなのは相手にしない。大自然よ、この神の恵み、神の贖いの素晴らしさを讃えようじゃないかと。「山よ、岩よ、われらが宿り」というあの山男の歌、あれですよ。大声で主を讃えるという、そういう気持ちがあるにでている。

エホバはヤコブを贖えり。イスラエルのうちに栄光をあらわし給う」(イザヤ 44・23)

と。45章に、

「<sup>7</sup>われは光をつくり又くらきを創造す。われは平和をつくりまた禍害を創造す。我はエホバなり。我すべてこれらの事をなすなり。<sup>8</sup>天ようえより滴らすべし、雲よ義をふらすべし。地はひらけて救を生じ、義をもとに萌い出すべし。

義と救とは等しいということ。

われエホバ之を創造せり」(イザヤ45・7～8)

それからついでながら、イザヤ45章14節、

「<sup>14</sup>……まことに神はなんじの中にいますり、このほかに神なし一人もなしと。

<sup>15</sup>救をほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝はかくれています神なり」

(イザヤ45・14～15)

ここに「隠れています神」というのが出てくる。それから21節、



「<sup>21</sup>……我のほかには神あることなし。われは義をおこない救をほどこす神にして我のほかには神あることなし。<sup>22</sup>地の極なるもろもろの人よ、なんじら我をおおぎのぞめ、然らばすくわれん。われは神にして他に神なければなり。……<sup>24</sup>人われに就いていわん正義と力とはエホバにのみありと。……<sup>25</sup>イスラエルの裔はエホバによりて義とせられ且つほこらん」(イザヤ45・21～25)

それからついでながら46章、これも私は大好きです。  
「<sup>3</sup>ヤコブの家よ、イスラエルのいへの遺れるものよ、腹をいでしより我におわれ胎をいでしより我にもたげられしものよ、皆われにきくべし。<sup>4</sup>なんじらの年老るまで我はかわらず、白髪となるまで我なんじらを負わん。我つくりたれば拾ぐべし。我また負いかつ救わん」(イザヤ46・3～4)

これは製造物責任の責任者で、  
「あんたを造つたのは私だ。どんな出来損ないでも最後まで私が責任をもつ。救いも全部私から出る。いっぺん、造りに失敗した。でも、もう一度再生産して素晴らしいものに造りかえる。神の熱心がこれをなし給う」

と。だから、救いは神から出てくるんです。人間は、  
「救ってくれ!」  
と叫んでいるかも知りませんが、神さまの方が、

「創造主である私が、初めの創造は失敗だったかもしれない、でももう一回やり直して、素晴らしいものに仕立てあげてみせる。目を見張って見ておれ」

と、まあそういう意気込みがイザヤ書を通して語られている。それをキリストはしかと受けとって、イザヤ書で預言されたその預言を——ひとりで成るのではない——

「私を通してその預言を実現する」  
と。そのようにキリストはイザヤ書を受けとってくださいましたわけですから、

もうひとつイザヤ書で、今の関連で言っておきたかったことは、  
「救いというのは、我みずからの故によりて」

という言葉がある。  
「<sup>25</sup>われこそ我みずからの故によりてなんじの咎をけし、汝のつみを心にとめざるなれ」(イザヤ43・25)

イザヤがそうやって、救いは神ご自身から出ている救いだということをお預言してくれました。それをしっかり受けとって実現してくださいましたのがイエスキリストさまですよ。それを今度は、ヨハネの手紙の中で、

「愛というは、我ら神を愛せしにあらざ、神自ら我らをして、その御子を我々の咎のためにくださった。そこに愛がある」

ということをヨハネの第一の手紙第4章で言っています。7節から、





「<sup>7</sup>愛する者よ、われら互いに相愛すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、神より生れ、神を知るなり。<sup>8</sup>愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。<sup>9</sup>神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。<sup>10</sup>愛というは、我ら神を愛せしにあらざ、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給いし是なり。<sup>11</sup>愛する者よ、斯のごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがい相愛すべし」(ヨハネ一4・7〜11)

神さまがご自分のご計画に従って、ご自分の聖なる意志に従って、我らを救おうとなさった。その救いの道としてイエスをくださった。御子イエスに我々のマイナス全部を背負わせて、屠られる羔としてイエスを十字架にかけて、そして我々に永遠の生命というプラスをくださった。これが愛なんです。そのことをこのヨハネの第一の手紙の第4章で言っている。

「愛というは、我ら神を愛せしにあらざ、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給いし是なり」

「宥の供物」なんていうと、なにか人身御供のようで、あまりいい響きではありません。でも、我々の罪の贖い、これをイエスはしっかりと御意として受けとって成就してくださった。

## ●種蒔きの譬話

講筈レジュメのところを見ていただきたい。第2回集会のところです。

《試練・患難の中での戦い》

このレジュメの方はきわめて簡単にしか書かれていません。まずはここにあげましたものをちよつとたどつてみたいと思います。

種蒔きの譬え話(マタイ13・1〜23、マルコ4・1〜20、ルカ8・4〜15)》

マタイ伝によりますと、イエスは譬えでもつていろんなことをお話になつている。直接的なお話はなさらなかったというような言い方をしている。まずマタイ伝13章から読みます。

「その日イエス家を出でて、海辺に坐したもう。<sup>2</sup>大なる群衆もとに集りたれば、イエスは舟に乗りて坐したまい、群衆はみな岸に立てり、

イエスは大声だったんでしようね。舟に乗つて少し離れたところから浜辺にいる群衆に声をかけられた。風がキリストの後から吹いてきて、声を運んでいったのかもしれないけれども。かなり大きな声だったのではないでしようか。あの頃はマイクなんてありません。でもイエスのお声はきつと響き渡つたんでしようね。

<sup>3</sup>譬にて数多のことを語りて言いたもう、『視よ、種播く者まかんとて出づ。』

<sup>4</sup>播くとき路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。<sup>5</sup>土うすき礎地に落ちし種あり、土深からぬによりて速かに萌え出でたれど、<sup>6</sup>日の昇りし時やけ



て根なき故に枯る。<sup>7</sup>茨の地に落ちし種あり、茨そだちて之を塞ぐ。<sup>8</sup>良き地に落ちし種あり、<sup>あるい</sup>或は百倍、或は六十倍、或は三十倍の実を結べり、<sup>9</sup>耳ある者は聞くべし』

これだけのお話を聴いて、ピンとみな来たんでしようか。弟子たちもわからなかったのでしょうか、多分。そしてまずは、なんで譬でお話になるんですかと、聞きました。<sup>10</sup>弟子たち御許に來りて言う『なにゆえ譬にて彼らに語り給うか』  
それに対して、

<sup>11</sup>答えて言い給う『なんじらは天国の奥義を知るところを許されたれど、彼らは許されず。』

弟子たちは許されたけれども、ちつともわかってない。あなた方は許されているけれども、わかっていない。一般の方は許されてもしていない。だから、譬で語るのだと。

<sup>12</sup>それ誰にても、有てる人は与えられて愈々豊かならん。されど有たぬ人は、その有てる物をも取らるべし。<sup>13</sup>この故に彼らには譬にて語る、これ彼らは見ゆれども見ず、聞こゆれども聴かず、また悟らぬ故なり。<sup>14</sup>斯てイザヤの預言は、彼らの上に成就す。曰く、「なんじら聞きて聞けども悟らず、見て見れども認めず。<sup>15</sup>此の民の心は鈍く、耳は聞くに懶く、目は閉じたればなり。

皆さんはこれでは困りますよね。聞けども悟らず、見れども認めず。心は鈍くなつて、耳は聞いているのか聞いていないのかわからない、目は閉じたままどうとうとしている。

これ目にて見、耳にて聴き、心にて悟り、<sup>ひるがえ</sup>翻りて、我に医さるる事ながらん為なり」

ちよつと残酷です。

<sup>16</sup>されど汝らの目、なんじらの耳は、見るゆえに、聞くゆえに、<sup>さいわい</sup>幸福なり。

「ああ、よかった、よかった。おれたちは大丈夫なんだ」ときつと弟子たちは思ったかもしれない。

<sup>18</sup>然れば汝ら種播く者の譬を聴け。

ここからが大事です。

<sup>19</sup>誰にても天国の言をききて悟らぬときは、<sup>悪しき者</sup>悪しき者きたりて、其の心に播かれたるものを奪う。路の傍らに播かれしとは<sup>かか</sup>斯る人なり。

せつかく種播かれた。着地するまでもなく、鳥がついばんで持っていつてしまった。根をおろすいとまもなく、御言は雲散霧消してしまったというわけです。石地はどうか。

「<sup>5</sup>土うすき<sup>いしじ</sup>礎地に落ちし種あり、土深からぬによりて速かに<sup>すみ</sup>萌え出でたれど、<sup>6</sup>日の昇りし時やけて根なき故に枯る」

いったんは着地して、根も出て育ちかけたけれども、日照りになるともう枯れてしまったという。これは一体何でしょうかと。



20 礎地に播かれしとは、御言をききて、直ちに喜び受くれども、

「ああ、いい話を聞いた。うれしい」と言つたけれども、

21 己に根なければ暫し耐うるのみにて、

しばしでも耐えたのはえらいんですけれども、しかしながら、

御言のために艱難、あるいは迫害の起るときは、直ちに躓くものなり。

このクリスチャンが多いんですね。キリストの救いを聞いて、

「十字架で罪ゆるされました。新しい生命をいただきました。うれしいです」

と。しばらくは喜んでいて。でも、そのためにいろんな迫害がやってくる。まず家族の者が反対する。

「キリスト教なんてヨーロッパのものだ。お前は日本先祖伝来の宗教を捨てるのか。

お前はもう勘当だ!」

とかなんとか言つて、家の中で文句が出てくる。そうすると、

「そんならもうやめときます」

と。皆さん、どうですか。ヨーロッパはキリスト教国でしょ。あそこはそんなことはないわけです。ところが、日本は異邦人で異邦の国でしょ。そこへ福音が着地しようと思つても、こういう現象がいくらもあるんです。個人として受けて喜んでいても、家の者が承知しない。

「お前、そんなのを信じるなら勘当だ。家から追っ払うよ」

「ああ、もう捨てますから、捨てますから」

と。そういうことが日本では起こりやすいと思う。

だから、御言を聞いた時は直ちに喜び受けるけれども、根っこがない。よく耕されていない。根っこがない。しばらくは耐えるけれども、御言のために艱難、あるいは迫害が起こつてくると、もうそこでギブアップ、直ちに躓く。それから三つ目は、

「茨の地に落ちし種あり、茨そだちて之を塞ぐ」

茨の地。どうも着地した場所がわるかったみたいですね。どういふことかというのと、

22 茨の中に播かれしとは、御言をきけども、世の心労と財貨の惑とに、御

言を塞がれて実らぬものなり。

これも多いですね。世の心づかい。家族のこと、職業のこと、いろいろこの世の、人間として生きていかなければならない、そういうものがたくさんある。それからもうひとつ、富金を積まれたら、

「お前、キリストを捨てたら、こつちの就職口があるぞ」

と。就職の面接でハッキリ、キリストを告白して、

「それで受け入れられなかつたら、就職は結構です」

と、それだけの覚悟をもって面接に臨むか。それとも、

「あんだ、何か宗教はあるんかね?」



「いえ、特にございませぬ」

なんて言つてゴマ化すのか。絶対にゴマ化してはいかんですよ。もう皆さんは就職の心配はないからいいけれども、皆さんの子どもさんとかお孫さんがそういう就職の時にいや、私は最高裁に呼ばれた時に言つたんです。

「私は裁判で宗教を持ち込んだりしません。また東京で伝道活動なんかもいたしません。ただ京都には私と一緒に祈つてきたたくさんの方がいらつしやいます。特にお年寄りの方々といつもずっと日曜ごとに祈つてきました。だから、私は月曜から金曜の裁判所でのお勤めはしつかりいたします。けれども、京都の人たちと祈りを共にする、これも私は守りたいんです。それがいけなければ、私は最高裁判事をお受けできません」

と、私はハッキリ言つたんです。事務総長が、

「それでは、長官にいつぺん聞いてみます」

と電話をかけてくれた。そしたら、

「オーケーです」

と。そうなんですよ。それで私は、初めは毎週でも帰りたかつたけれども、忙しくて帰れない。二週間に一回にした。そしたら、

「帰らなくていいんですか」

と向こうで心配してくれた(笑)。

「いや、とても忙しくて帰つてられません。二週間に一回で結構です」

と。これが大事なんです。どんな名誉職であろうと、重要なポストであろうと、

「キリストを告白して受けいれられなければ結構です」

と。たとえば、結婚でいい話があった。「クリスチャンは御法度だ」と。

「いやあ、魅力的な相手なんだけれども……。はい、キリストを捨てます」

と。ダメですよ、そんなのは。この世でたえず選択を迫られることがあるでしょ。その時にハッキリとキリストを採つていくという、それが大事なんです。それをやらなかったら、必ずあとで後悔しますよ。だいいち祝福がきませんから。

キリストは生命を掛けられたんです。そうでしょ。生命をかけられたそのお方に命懸けで応えていくというのが、これが人間のいちばん基本的なことですよ。それができなくて、他のものにつられて裏切るといふのは、本当に人間として情けない恥ずかしいことだと私は思う。

それがここでいうなら、

「世の心労と財貨の惑とに、御言を、信仰を塞がれて実らぬものなり」  
ということ。ところが、

23 良き地に播かれしとは、御言をききて悟り、実を結びて、或は百倍、ある



いは六十倍、あるいは三十倍に至るものなり』(マタイ13・1〜23)  
 こういう譬話。これは非常に現実味をおびてますね。特に日本という国においてはそうです。ヨーロッパではキリスト教国ですから、こんな心配はいらないんでしょうけれども、日本という国では、これは非常に現実味をおびてます。

### ●世の心労

今はマタイ伝でしたが、マルコ伝を開いてみましょう。どこがちがうか。マルコ伝4章、譬話の内容は一緒なんです。弟子たちは、それを説き明かしてくださいと言った。

「<sup>14</sup>播く者は御言を播くなり。<sup>15</sup>御言の播かれて路の傍らにありとは、かかる人をいう、即ち聞くと、直ちにサタン来りて、その播かれたる御言を奪うなり。」

着地するか着地しないか、心に届くか届かないかという時にもうサツサツとサタンが奪っていつて、全然その人のからだの中には宿らないという人たち。

今度は、石地にある人はどういう人か。

<sup>16</sup>同じく播かれて磽地<sup>いしじ</sup>にありとは、かかる人をいう、即ち御言をききて、直ちに喜び受くれども、<sup>17</sup>その中に根なければ、

「根なければ」とあります。

ただ暫し保つのみ、御言のために患難また迫害にあう時は、直ちに躓くなり。それから茨の中はどうか。

<sup>18</sup>また播かれて茨の中にありとは、かかる人をいう、<sup>19</sup>すなわち御言をきけど、世の心労、財貨の惑、さまざまの慾<sup>よく</sup>いたり、

これがこの世的なものです。世の心づかい。家族を養わねばいかん。家族に対して責任がある。それからやはり人間は食べていかないといかん。それにはそれなりの収入も必要だ。でも、あの就職先はキリストは御法度だ。じゃあクリスチャンであるということをして隠して就職しましょうと。それが宝の惑い。それからさまざまの欲。これはますますいけません。そういうものが御言をじゃまする。だから実らない。

御言を塞ぐ<sup>ふさぐ</sup>によりて、遂に実らざるなり。<sup>20</sup>播かれて良き地にありとは、かかる人をいう、即ち御言を聴きて受け、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶなり』

(マルコ4・14〜20)

と。ルカ伝がいちばん丁寧なんですよ。他は割にそつげなかつた。ルカは丁寧に書いています。だいたいルカは丁寧なんです。現実の御言は、他の福音書の方が忠実かもわからないけれども、ルカはそれを補っている、そういう感じがしますね。8章11節、

「<sup>11</sup>譬の意は是なり。種は神の言なり。<sup>12</sup>路の傍らなるは、聴きたるのち、悪魔きたり、信じて救われる事のなからんために、御言をその心より奪う所の



人なり。

ちゃんと理由まで書いてあります。悪魔がきて、

「こいつが御言を受けとつて救われたら、わしの立つ瀬がない。だから、御言を奪つてしまえ」

ということ、心から御言を奪つてしまう。心の中に宿らない。では岩の上はどうか。

<sup>13</sup> 岩の上なるは、聴きて御言を喜び受くれども、根なければ、暫く信じて

嘗試のときに退く所の人なり。

受ける時は喜んで受けた。

「今日はいいい話を聞いた、今日の講筵は素晴らしかった」

といて喜んで帰った。ところが、その人に根つこがない。だから、しばらくは信じたけれども、試みがやってくる。試練がやってくる、

「ああ、もう結構です。はい、サヨナラ」

といて退いてしまう人。茨の中はどうか。私はこれがいちばん多いと思う。

<sup>14</sup> 茨の中に落ちしは、聴きてのち過ぐるほどに、世の心労と財貨と快樂と

に塞がれて実らぬ所の人なり」(ルカ8・11、14)

この「世の心労」には、私はやはり家族のこととか、そういうことが入っていると思う。家族に対して責任がある。キリスト教だったら良い就職口がない。そうすると家族を養つていくのに難しい。キリストを捨てれば、うんと高収入で雇ってくれる口がいくつあった。背に腹は代えられん。そういうのが多分、日本の現実にはあると思う。それは、

「神と富とに兼ね仕うることをあわず」

でしょ。企業というのは金儲けを目的にしているのだから、そこへキリストを持ち込んだら、それは向こうも困るでしょうね。

あの松下幸之助は——クリスチャンでないと思いますが——そういう人ではなかった。ちゃんと筋の通った理念の下に企業を経営していった、そういう方だと思います。

ルカ伝では、「茨の中」というのは、しばらくは喜んでいた。無事にすんだ。ところが、世の心労<sup>こころづかい</sup>、家族のこととか、いろんな家長としての責任がある。そういうことをいろいろ考えると、試練がやってきた時に実らない。「宝と快樂」というものは、蹴飛ばせるとおもうんだけど、いちばん困るのは、「世の心労」という、家族のこととかいろいろ自分が責任ある立場におる。たとえば、企業だったら、従業員を雇っていかなければいかん。そのときに、キリストオンリーでやっていったら、取引先が相手してくれない。

「やはりこのキリストの看板を引つ込めようかな」

なんてね、そういうことがあるかと思う。なにも自分個人のためよりも、自分の家族とか従業員とか、そういう者のためには、ここはやはり譲歩して妥協しないといかんとか、そういうのがあると思うんですよ。でも、そういう時に、



「主さま、あなたは、あなたを求めてくる者を決して飢え渴かしたりなさるはずではございません。私は御名の栄光のために敢えていい収入の入る道を断りました。でも、従業員たちを養うのはあなたです。お願いいたします」

と、そうやって開き直ってキリストにすがっていったら、私はきつと道が開けると思う。

クリスチャンの実業家で、私は若いころに非常に敬意をいただいたのは、「主婦の友」の方です。それから「白洋社」。あの方々は、

「職業を通して神の栄光が現れるように」

という祈りで仕事をなさった方なんです。それから「デイリーブレッド」もそうなんです。ようね。そういった実業家の方々にもちゃんと筋を通した方々がいらつしやいます。「メンソレータム」(近江兄弟社)もそうかもしれません。そういう方々がいらつしやるので、

「金儲けの企業はクリスチャンとは相容れない、キリスト教とは相容れない」

なんて、そんな狭い見をもたないでください。どの場面でもそれが世の役にたつものならば、そこで神の栄光が現れるはずなんです。それだけの信をもってキリストにすがって、そしてそこで働く。私は、そういう本当に祈りをもって事業をなさる方、祈りをもって就職する方、そういう方々をキリストは放っておかれないと信じています。

クリスチャンは就職とかそんなところでいろいろ苦労が多いと思う。金儲けを第一にしているのが企業でしょ。そういうところにキリストというのは邪魔になるかもしれないけれども、さつき言いましたように、実業家の中にも本当に「神の栄光のために」といつて事業を捧げている方々もいらつしやいますから、そういうところに導かれいく。どういう場所ではキリストの栄光は現れないという、そんな限定はないんです。

自衛隊であろうとどこであろうと、その置かれたところでキリストは栄光を現したもうと、そう私は信じています。自衛隊が良いとか悪いとか、戦争がどうのこうのと、そんなことを言っているのではない。そこが働き場所だと心に定めたら、そこで神の栄光が現れるように、キリストの御意が貫かれるように、私が自衛隊にいることによって自衛隊が御意にかなうような方向に行つてほしいと、そういう祈りをもって私ならその部署へ就きます。それがなければ就職しません。今度は、自衛隊の隊員がクリスチャンになったとします。それなら直ちに退職しないといけないのか。私はそんなことはないと思うんです。

私もクリスチャンになったのは、ちゃんと大学の教員としてのポストをもらってからのちにクリスチャンになった。その頃の私たちを導いていた宣教師は、熱心になったクリスチャンは全部、職業を捨てて伝道者の道につきなさいと勧める。それが献身、身を献げるということ。献金はお金を献げる。献身は身を献げる。身を献げるのは、伝道者になること、牧師になること、それしか彼らは思っていない。だから、熱心に燃えてきたやつは全部、引っこ抜いていく。そして自分たちの牧師養成学校へ放り込んで、そして自分たちの宣教師団の同労者として一緒にやりましょうと。彼らは、そういう志は神のためと思つているので



しょう。

こつちにしたら大迷惑なんです。それぞれの置かれた場所で、それぞれのところで神は栄光を現し給う。キリストは働き給う。私がそういうことに悩んでいた時に小池先生が助けてくれた。先生自身も大学の先生としての身分を持ちながら伝道に燃えていかれたお方ですよ。

### ●神さまが主役

私が小池先生に惹かれたのはどういう点かといいますと、だいたいキリスト教の伝道者とか熱心な導き手というのは、霊的な面をウワツと強調してそれだけ。それか、神学とか理屈の方をウワツとやって、霊的なことは一切ダメ。どっちかにかたよるんです。理屈ばかりの人か、霊的なウワツと祈って——なにか現象が起こるでしょ、癒しだとか奇蹟の——それに命をかけている。

ところが、小池先生はちがうんです。両方を兼ね備えている。非常に知的な面でも巾が広い、奥行きが深い。それから霊的な面でも高い次元を持つておられる。それで非常に中道を行つておられる。健全だった。私にとっては小池先生という存在がモデルでした。もちろん人間的にはいろんな躓きの点もあったでしょう。けれども、その志に私は非常に共感共鳴した。だから、私も大学の教師という立場を保ちながら、福音に身を献げようと思った。大学の教授としての論文が数少なかつたり、程度が低かつたり、それは申し訳ありません。でも、私はこのようにして二足草鞋わらじを履いて歩むということに決めました。

「どうぞ、主よ、この路を御意にかなうようにお導きください」

と。24歳から60年間それで来たわけです。人間にとつてどれが正しいとか、そんなことはそのときわかりません。委ねていくしかないですよ。

「主よ、御意にしたがつて私をお用いください。自分が利益、不利益、そんなことではない。御意が成つていくような、その路へと私を導いてください」

と。つまり、自分に死んでないとダメなんです。

「われ主と共に十字架せられたり、もはや我生くるにあらず」

と。古い私はもう死んでいる。私は死にたいぐらいの行き詰まっている時にキリストに導かれたんですから。本来死んでいた人間がキリストによって生き返らせていただいた、24歳で。そこからあとはおつりの人生なんです。あそこでもう行き詰まって死んでいたらもう終わり。それがキリストに導かれて新しい生命をいただいて、あとはおつりの人生だと思つていた。24歳から。それがもう60年続いてしまいました。

ただ悩みは、本当に小池先生みたいな霊的な次元に届かないし、いろんな面で足りないことがいっぱいある。

「これでいいんだろうか？」





という、その悩みがずっとありましたね。先生は講筵なさる時、

「私は聖霊を受けていなかったら、ここには立っていません」

とハッキリ言うんです。私は司会していて、

「もう、つらいなあ」

と思った。そんな聖霊を受けたという自覚が全然ないでしょ。ただキリストにすがったこととはあるけれども。先生は、

「私は聖霊を受けてますから。聖霊を受けてないやつはこんなところに立つんじや

ない」

なんて言う。

「かんべんしてよな、先生」

と(笑)。それから何年もたつてから聞いた、

「先生、私は大丈夫なんでしょうか？」

「お前は大丈夫だよ」

と、言下に言われましたね。

「へエ、そうですかあ」

と。全然自覚がないもの。聖霊を受けてぶつ倒れたとか、聖霊を受けて泡を吹いたとか、異言がバーツと飛び出したとか、何も現象がないんですよ。春雨がしみとおるようになってしまう。春雨がしみ込んでいっただけでしょ。だから、本当にそういう面ではいつも小さくなっていく。霊歌が出るわで、私は何もない。

「ああ、また今年もダメだったか。また来年の甲子園をめざして、これから一年間

修行を積もう……」

と、いつもトボトボと帰ってきたんです、鹿沢から。そんなのを繰り返しているうちに、こんなになってしまった。いつ変わったんですかと聞かれても、私はわからない。感染症にもいろいろある。ハッキリ自覚して病気に罹ったというのと、知らんまに病気が全身に行き渡ってしまったという——私の病気はキリストという病気——キリスト菌が私の全身を、蝕んだのではなくて活かしてしまった。だから人間の導かれ方はいろいろあると思う。人それぞれでいいんです。どういうパターンでないといかんなんてない。キリストが主役なんです。キリストがなさってください。十字架でもう我々は片づけられている。

「われ主と共に十字架せられたり、もはや我生くるにあらず。キリストわがう

ちにありて生きたもうなり」

と、あのパウロのガラテヤ書2章20節、21節をもって。そして、

「神初めに御業をなし給えり」

と。神さまが主役なんです。我々は神さまに捕まえられて操られている、操り人形みたい



なものだと思っていくらい。キリストは神さまの操り人形でしょ。キリストは、「自分は何も言っていない。私は何もできない。私はからっぽだ」と言っている。それを小池先生は「無者」と言われた。「からっぽ(0)」のキリストの中に神さまという「100」が宿った。だから、

「私を見た者は父を見た」

と、ハッキリ仰った。キリストは「0」だから、神さまという「100」が宿った。人間はゴタゴタしたやつがあるから、「100」が宿れない。宿れないで苦しんでいる。

「その宿れないお前の自我というやつを、私は十字架で片づけたから、もうお前は、旧いお前は死んでいっているんだ。十字架で片づけている。そうしたら、片づいている

ところに聖霊という聖い霊きよが来ざるを得ないではないか」

と。真空地帯を放っておいたらサタンがやってくる。十字架で片づけられたら、必ず聖霊がくだってくださる。だから、十字架と聖霊とはワンセット。十字架だけではダメ、聖霊だけでもダメ。十字架・聖霊、これをしっかりと受けとってほしい。今回の特別集会の次第でも、

《主題：「十字架・聖霊」の貫徹——キリスト道の神髄——》

と、書きましたでしょ。これは全部、キリストが我々に代わってやってくださっているということ。それを素直に受けとる。自分から出るものはひとつもない。そういうことをしっかりと受けとっていただきたいと思います。

### ●金持ちとラザロの譬話

今度は、「金持ちとラザロの譬え話」(ルカ16・19〜31)です。まあ、お金持ちの方にはこういう話を聞かせてあげたいですね。

「<sup>19</sup>或る富める人あり、紫色の衣と

これは最上の衣なんです。なにかお坊さんでもいろいろ着物に序列があるみたいですね。多分、紫色が最高なんでしょう。

細布ほそぬのを着て、日々奢おごり楽しみ。

こういうお金持ちがたくさんいるのではないですか、この世の中には。

<sup>20</sup>又ラザロという貧しき者あり、腫物しゅもつにて腫はれただれ、富める人の門かどに置かれ、<sup>21</sup>その食卓より落つる物にて飽かんと思う。

パンくずでやつとお腹を満たしている。

而して犬ども来りて其の腫物ねぶを舐れり。

そういう惨めなすがた。

<sup>22</sup>遂にこの貧しきもの死に、御使たちに携えられてアブラハムの懷裏ふところに入れり。



これは本当の姿だと思えます。死んだら、必ずいろんな霊がやってくるそうですよ。サンダー・シングがちゃんと書いてます。自分といちばん親和性のある者、自分がいちばん親しみやすい霊をそれぞれの人が選んでいくそうです。だから、日頃からキリストに親しんでいる方はそのような霊がきたら、

「あつ、これが私のお友だちだ」

と。向こうもまた喜んで迎えてくれる。ところが日頃そういうお付き合いがなかったら、

「まぶし眩くて煙たくて勘弁してよな」

と。黒い霊がきたら、あつこれが私の親しい霊だといってそつちを選んでいく。神さまは自ら裁きはなさらない。自分でちゃんと行く先を決めていく。これがサンダー・シングに示された霊界なんです。この貧乏な人は、御使たちが迎えにきた。アブラハムの御懐に入っていた。お金持ちもやはり死んだ。

富める人もまた死にて葬られしが、<sup>23</sup>黄泉にて<sup>23</sup>苦悩の中より目を挙げて遙に<sup>はるか</sup>

アブラハムと其の懐裏におるラザロとを見る。

痛快ですね。苦しくて助けてほしいと思つて、ふつと見たら、向こうの遙かあなたにラザロが居る、

「あれ？ アブラハムの懐に居る。最高の場所に居るではないか。おくい、ラザロよ、俺を助けてくれ〜！」

と。自分の門前で乞食していて犬にペロペロなめられていたあの汚いラザロです。それがあんないいところに居る。「おくい、ラザロ、助けてよ！」と。

<sup>24</sup>乃ち呼びて言う「父アブラハムよ、我を憫みて、ラザロを遣し、その指のさきを水に浸して我が舌を冷させ給え、我はこの焰のなかに悶ゆるなり」

火焰地獄ですね、そこで苦しんでいる。

「アブラハムさん、あんたに来てほしいとまでは言わない。あんたの所に居る

ラザロをつかわしてください」

と言った。

<sup>25</sup>アブラハム言う「子よ、憶え、なんじは生ける間、なんじの善き物を受け、

ラザロは悪しき物を受けたり。

地上ではラザロはさんざんな惨めな姿だった。あんたは精いっぱい好きなことをやってきた。満ち足りてきたと。

今ここにて彼は慰められ、汝は悶ゆるなり。

それだけではないんだよ。あんたの所とこちらとは間に淵があつて渡れない。あんたの所へ行こうとしても行けないし、あなたの方から来ようと思つても来れない。大きな淵が横たわっていて、往来不可能なんだと。

<sup>26</sup>然のみならず此処より汝らに渡り往かんとすとも得ず、其処より我らに來



り得ぬために、我らと汝らとの間に大いなる淵<sup>ふち</sup>定めおかれたり」

それで、富める人は言った、ああわかりましたと。

27 富める人また言う「さらば父よ、願わくは我が父の家にラザロを遣したまえ。

28 我に五人の兄弟あり、この苦痛<sup>くるしみ</sup>のところに来<sup>きた</sup>らぬよう、彼らに証<sup>あかし</sup>せしめ給え」

今ここへ来てくれとはもう言わん。わしは今苦しんでいるのはしようがない、自業自得<sup>じごうじとく</sup>だ。でも、私の家にはまだ何人も家族が残っている。兄弟たちがいる。その兄弟たちにラザロを遣わして、

「お前たち、あのお兄ちゃんの真似をしたらあかんで。お兄ちゃんは今苦しんでいる。お兄ちゃんはしようがない。あきらめている。でも、あんた方は悔い改めて、お兄ちゃんのようなことにならないようにやんなさいよ」

と、ラザロを遣わしてもらったらきつと彼らは悔い改めますよ、と言った。つまり、「あなたは生ける間は善きものを受け、ラザロは悪いものを受けとった。今ここで彼は慰められる。あなたは悶えている。それだけではない。ここからあなたの所へ行こうとおもっても行けない。またあなたの所からこつちへ来ようと思っても出来ない。大きな淵が間にあつて越えられない。富める人は言った。はい、わかりました。もう私のことはいいですわ。けれども、父の家にラザロを遣わしてやってください。五人の兄弟がいます。私だけで充分です、苦しむのは。こんな苦しい所に来ないように彼らにラザロにいろいろ話をさせてやってください」

29 アブラハム言う「彼らにはモーセと預言者とあり、之に聴くべし」

ところが、アブラハムは言った。モーセがいるじゃないか。預言者もいるじゃないか。モーセや預言者たちに聞いたら充分だよと。

30 富める人いう「いな父アブラハムよ、もし死人の中より彼らに往く者あらば、

悔<sup>くいあらた</sup>改<sup>いあらた</sup>めん」

富める人は言いました。

「いやいや、モーセや預言者ではダメなんです。現実はこの死後の世界を味わって見てきたやつがリポートしてくれたら、みんな聞きますよ。モーセや預言者やら、そんなのでは全然効き目がありません」

と言った。これは今でも通用しそうな話でしょ。

「聖書にこう書いてある」

「いや、聖書はいかん。現実に向こうの世界からひょこつと現れて、向こうはこうだったと言ってくれたら、みんな悔い改めるよ」

ところが、アブラハムは言った、

31 アブラハム言う「もしモーセと預言者とに聴かずば、たとい死人の中より



甦<sup>よみがえ</sup>える者ありとも、其の勸<sup>すすめ</sup>を納<sup>い</sup>れざるべし」(ルカ6・19～31)  
たとえ死人の中から甦<sup>よみがえ</sup>つてあなた方にレポートしても、絶対聞くはずがないよと。これは本当に現代でも通用しそうですよ。

「聖書にこう書いてある、偉人たちの伝記にはこうである、と言ったって信用しない。今現に向こうから誰かが出てきて、天界はこうだった、向こうの世界はこうだった、と言つてくれたらみな聞くよ」

と。そういう人がたくさんいると思う。でもそれはダメ、というお話ですね。だから、私はここは大好きなんです。

### ●患難と忍耐

《イエスに従う者の心構え「己を棄て、日々、己が十字架を負いて、我に従え！」(ルカ9・23～27、マタイ16・24～28、マルコ8・34～9・1)

これはもうさき程、ルカ伝を代表して言いましたね。

「日々、己を棄て、己が十字架を負いて、我に従え」

という、これがクリスチャンの心構えである。それから次に、

患難と忍耐(ローマ書5・1～11、8・18～39、コリント前書10・13、ヘブル書10・32～39、ヤコブ書1・2～4、1・12、5・7～11、ペテロ前書2・19～25、3・8～18、4・12～14、5・7～11、ヨハネ黙示録7・9～17、21・1～7)》

これもたくさんズラズラとあげましたので、簡単にたどつてみます。まずローマ書5章1節から11節。

「1斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我らの主イエス・キリストに頼<sup>よ</sup>り、神に対して平和を得たり。2また彼により信仰によりて今、立つところの恩恵<sup>めぐみ</sup>に入ることを得、神の栄光を望みて喜ぶなり。3然<sup>しか</sup>のみならず患難をも喜ぶ、ここに「患難」が出てきます。

そは患難は忍耐を生じ、4忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。

5希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛、われらの心に注げばなり。6我等のな弱かりし時、キリスト定まりたる日に及びて敬虔ならぬ者のために死に給えり。7それ義人のために死ぬるもの殆<sup>ほとん</sup>どなし、仁者のためには死ぬることを厭<sup>いと</sup>わぬ者もやあらん。8然れど我等がなお罪びとたりし時、キリスト我等のために死に給いしに由りて、神は我らに対する愛をあらわし給えり。9斯く今その血に頼りて我ら義とせられたらんには、まして彼によりて怒より救われざらんや。10我等もし敵たりしとき御子の死に頼りて神と和<sup>やわ</sup>らぐことを得たらんには、まして和らぎて後その生命によりて救われざらんや。11然のみならず今われらに和睦<sup>やわひ</sup>を得させ給える我らの主



イエス・キリストに頼りて神を喜ぶなり」(ロマ5・1〜11)  
 それから、8章18節から39節、

「18われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。19それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。20造られたるものの虚無に服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。21然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれ、神の子たちの光榮の自由に入る望は存れり。22我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。23然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。24我らは望によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争でなお望まんや。25我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん」(ロマ8・18〜25)

「忍耐をもて」という。始めに「今の時の苦難は」と、苦難のことが出てきました。そしてここには、

「忍耐をもてこれ(望)を待つ」

という。それから39節まで引いてますが、これは省略します。御霊が執り成して下さることから、キリストに在る勝利をうたっている。

それから、コリント前書10章13節。神は、耐え難き試練にあわせたまわらない。試練と共に逃れの道を用意してく下さるというところ。

「13汝らが遭いし試練は人の常ならぬはなし。」

つまり、尋常なものだったよと。滅多にないような、そんな試みには遭ってないはずだ。人の常なるものだよと。

神は真実なれば、汝らを耐え忍ぶこと能わぬほどの試練に遭わせ給わず。汝らが試練を耐え忍ぶことを得んために之と共に遁るべき道を備え給わん」(コ

リント前10・13)

これは慰めですよ。試練がくる。それに耐えておれば、必ず逃れの道をちゃんと備えて下さる。だから、試練がきたらギブアップして、

「どこか他の宗教へ行きます」

と、そんなことはやめてくださいいね。キリストオンリーと貫けば必ず逃れの道を備えたもう。

それから、ヘブル書10章32節、

「32なんじら御光を受けしのち苦難の大なる戦闘に耐えし前の日を思い出でよ。33或は誹謗と患難とに遭いて観物にせられ、或は斯かることに遭う人の友となれり。34また囚人となれる者を思いやり、永く存する尤も勝れる所有の己にあるを知りて、我が所有を奪わるるをも喜びて忍びたり。35されば大



なる報を受くべき汝らの確信を投げすつな。36 なんじら神の御意を行いて約束のものを受けん為に必要なは忍耐なり。忍耐です。

「御意を行いて約束のものを受けるために必要なものは忍耐である」と。

37 『いま暫くせば、来るべき者きたらん、遅からじ。38 我に属ける義人は、信仰によりて活くべし。もし退かば、わが心これを喜ばじ』39 然れど我らは退きて滅亡に至る者にあらず、靈魂を得るに至る信仰を保つ者なり。1 それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」(ヘブル10・32～11・1) それから、ヤコブ書1章2節から4節。私はヤコブ書が大好きです。痛快です。

「2 わが兄弟よ、なんじら各様の試練に遭うとき、只管これを歡喜とせよ。私はなかなかそこまでいきませんけれども。」

3 そは汝らの信仰の験は、テストを受けているんだと。さつき、

「忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ず」とありましたね。

忍耐を生ずるを知ればなり。4 忍耐をして全き活動をなさしめよ。これ汝らがかたく備りて、欠くる所ならん為なり。……12 試練に耐うる者は幸福なり、之を善しとせらるる時は、主のおのれを愛する者に、約束し給いし生命の冠冕を受くべければなり。……17 凡ての善き賜物と凡ての全き賜物とは、上より、もろもろの光の父より降るなり。父は変わることなく、また回転の影もなき者なり」(ヤコブ1・2～17)

素晴らしいでしょ、ヤコブ書は。それから、5章7節。これも忍耐のことを説いている。

「7 兄弟よ、主の来り給うまで耐え忍べ。視よ、農夫は地の貴き実を、前と後との雨を得るまで耐え忍びて待つなり。」

向こうでは、「前の雨」と「後の雨」と、秋に2回雨が降るそうです。それで乾ききつた土地が豊かになるという。

8 汝らも耐え忍べ、なんじらの心を堅うせよ。主の来り給うこと近づきたればなり。9 兄弟よ、互に怨言をいうな、恐らくは審かれん。視よ、審判主の前に立ちたもう。10 兄弟よ、主の名によりて語りし預言者たちを苦難と耐忍との模範とせよ。

テモテ書にもありましたね。

「おおよそ信心深く生きようとする者はこの世で苦しみに遭う」と、ハッキリ書かれていました。



11 視よ、我らは忍ぶ者を幸福なりと思う。なんじらヨブの忍耐を聞けり、主の彼に成し給いし果を見たり、  
最後は祝福されました。

即ち主は慈悲ふかく、かつ憐憫あるものなり」(ヤコブ5・7～11)

それからペテロ前書2章19節、

「19 人もし受くべからざる苦難を受け、神を認むるに因りて憂に堪うる事をせば、これ誉むべきなり。

不当な仕打ちを受けて、それでもなお忍耐してそれを突破するなら、それは幸いだ。罪を犯して打たれたって、これは自業自得だと。

20 もし罪を犯して撻たるるとき、之を忍ぶとも何の功かある。されど若し善を行いてなお苦しめらるる時これを忍ばば、これ神の誉めたもう所なり。

21 汝らは之がために召されたり、

全然この世の原理とは違いますね。

キリストも汝らの為に苦難をうけ、汝らを其の足跡に随わしめんとて模範を遺し給えるなり。22 彼は罪を犯さず、その口に虚偽なく、23 また罵られて罵らず、苦しめられて脅かさず、正しく審きたもう者に己を委ね、24 木の上に懸りて、

十字架ですね。

みずから我らの罪を己が身に負い給えり。これ我らが罪に就きて死に、義に就きて生きん為なり。汝らは彼の傷によりて癒されたり。

「その打たれし傷によりて癒されたり」と、イザヤ書53章です。

25 なんじら前には羊のごとく迷いたりしが、今は汝らの靈魂の牧者たる監督に

キリストのところへ、

帰りたり」(ペテロ前2・19～25)

●キリストに対するご恩返し

それから、3章8節から、

「8 終に言う、汝らみな心を同じうし、互に思い遣り、兄弟を愛し、憐み、へりくだり、9 悪をもて悪に、謗をもて謗に報ゆることなく、反つて之を祝福せよ。汝らの召されたるは祝福を嗣がん為なればなり。10 『生命を愛し、善き日を送らんとする者は、舌を抑えて悪を避け、口唇を抑えて虚偽を語らず、11 悪より遠ざかりて善をおこない、平和を求めて之を追うべし。12 それ主の目は義人の上にとどまり、その耳は彼らの祈にかたむく。されど主の御顔は悪





をおこなう者に向う』<sup>13</sup>汝等もし善に熱心ならば、誰か汝らを害わん。<sup>14</sup>たと  
い義のために苦しめらるる事ありとも、汝ら幸福なり『彼等の威嚇を懼るな、  
また心を騒がすな』<sup>15</sup>心の中にキリストを主と崇めよ、また汝らの衷にある  
望の理由を問う人には、柔和と畏懼

「畏懼」というのは神さまに對する畏れですよ、敬虔の念というかな。  
とをもて常に弁明すべき準備をなし、

「あなたの希望は何ですか。あなたはなぜいつもそんな苦境の中にありながら、二  
コニコしているのですか。なぜ平安なんですか？」

と我々に聞かれたら、ハッキリと答えなさいと。

<sup>16</sup>かつ善き良心を保て。これ汝等のキリストに在りて行う善き行状を罵る者  
の、その誘ふことに就きて自ら愧じん為なり。

初め罵っているやつが「ああ、罵つてわるかった」と自ら恥じ入ることになるよと。

<sup>17</sup>もし善をおこないて苦難を受くること神の御意ならば、悪を行いて苦難を  
受くるに勝るなり。

悪を行つて苦しむのは当たり前だ。しかし、善を行つて苦しむ、それをじつと耐えている  
なら、これは神がよみしたもうと。

<sup>18</sup>キリストこそ汝らを神に近づかせんとて、

正しきもの正しからぬ者に代りて、

正しきものも正しからぬ者もみな同じなんです、どんぐりの背くらべなんですよ、神さま  
の目から見たら。

一たび罪のために死に給えり、彼は肉体にて殺され、霊にて生かされ給える  
なり。<sup>19</sup>また霊にて往き、獄にある霊に宣伝えたまえり」(ペテロ前3・8〜19)

これは、「ノアの時代に、言うことを聞かなかつた者たちの所にまでも下りて行つて救われた」  
ということを言っている。それから4章12節、

「<sup>12</sup>愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試煉を異なる事として怪  
しまず、<sup>13</sup>反つてキリストの苦難に与れば、与るほど喜べ、なんじら彼の榮  
光の顯れん時にも喜び樂しまん為なり。<sup>14</sup>もし汝等キリストの名のために誘  
られなば幸福なり。榮光の御霊すなわち神の御霊なんじらの上に留り給えば  
なり。

こういう素晴らしい約束があります。

<sup>15</sup>汝等のうち誰にても或は殺人、あるいは盗人、あるいは悪を行う者、ある  
いは妄に他人の事に干渉する者となりて苦難に遭うな」(ペテロ前4・12〜15)

それから5章7節から11節、



「7又もろもろの心<sup>こころ</sup>を神に委ねよ、神なんじらの為に慮<sup>おぼん</sup>ばかり給えはなり。  
8慎<sup>つつし</sup>みて目を覚ましおれ、汝らの仇<sup>あだ</sup>なる悪魔、ほゆる獅子のごとく歴<sup>へめぐ</sup>廻りて  
呑むべきものを尋ぬ。9なんじら信仰を堅うして彼を禦<sup>ふせ</sup>げ、なんじらは世に  
ある兄弟たちの同じ苦難<sup>くるしみ</sup>に遭うを知ればなり。10もろもろの恩恵の神、すな  
わち永遠の栄光を受けしめんとて、キリストによりて汝らを召し給える神は、  
汝らが暫<sup>しばら</sup>く苦難をうくる後、なんじらを全うし、堅うし、強くして、その基<sup>もと</sup>  
を定め給わん。11願わくは権力<sup>ちから</sup>世々限りなく神にあれ、アアメン」(ペテロ前  
5・7〜11)

それから最後に黙示録7章9節から17節、

「9この後われ見しに、視よ、もろもろの国・族・民・言語の中より、誰も  
数えつくすこと能わぬ大なる群衆、しろき衣を纏<sup>まと</sup>いて手に棕櫚<sup>しゆろ</sup>の葉をもち、  
御座<sup>みくら</sup>と羔羊<sup>こひつじ</sup>との前に立ち、10大声に呼わりて言う『救は御座に坐したもう我  
らの神と羔羊とにこそ在れ』11御使みな御座および長老たちと四つの活物<sup>いきもの</sup>と  
の周囲<sup>まわり</sup>に立ちて、御座の前に平伏し神を拝して言う、12『アアメン、讚美・  
栄光・知慧・感謝・尊貴・能力・勢威、世々限りなく我らの神にあれ、アア  
メン』13長老たちの一人われに向いて言う『この白き衣を著<sup>き</sup>たるは如何なる  
者にして何<sup>いず</sup>れより来りしか』14我いう『わが主よ、なんじ知れり』かれ言う『か  
れらは大なる患難<sup>なやみ</sup>より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者  
なり。

血で洗うと赤くなるのが、白くなるという。羔<sup>こひつじ</sup>の血で真つ白になる。

15この故に神の御座<sup>みくら</sup>の前にありて、昼も夜もその聖所にて神に事<sup>つか</sup>う。御座に  
坐したもう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。16彼らは重ねて飢えず、重  
ねて渴かず、日も熱も彼らを侵<sup>おか</sup>すことなし。17御座の前にいます羔羊は、彼  
らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給う  
べければなり』(黙示録7・9〜17)

それから21章1節から7節、

「1我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天<sup>あめ</sup>と前の地とは過ぎ去り、  
海も亦なきなり。2我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾<sup>か</sup>  
たる新婦<sup>はなよめ</sup>のごとく準備<sup>そなえ</sup>して、神の許<sup>もと</sup>をいで、天より降<sup>くだ</sup>るを見たり。3また大  
なる声の御座<sup>みくら</sup>より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕<sup>とも</sup>にあり、神、  
人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在<sup>いま</sup>して、4かれらの  
目の涙をことごとく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、悲歎<sup>かなしみ</sup>も号叫<sup>さけび</sup>も  
苦痛<sup>くるしみ</sup>もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり』5かくて御座に坐し  
給うもの言いたもう『視よ、われ一切のものを新にするなり』また言いたも



う『書き記せ、これらの言は信すべきなり、真なり』<sup>6</sup>また我に言いたもう『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、始なり、終なり、渴く者には価なくして生命の水の泉より飲むことを許さん。<sup>7</sup>勝を得る者は此等のものを嗣がん、我はその神となり、彼は我が子とならん』(黙示録21・1〜7)

それと反対に、臆する者とかいろんな者はダメだということ。我々は、マイナスの方はいういい。このプラスの方、それをしつかり受けとる。こういう素晴らしい約束を我々はいただいている。こういう特権階級なんです。キリストがご自分の血をもって贖って、新しい神の民として生み出してくださいました。

「胸を張って行け、私がついているぞ。この世は戦いだ」と。

「なんじら世にありては患難あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」(ヨハネ16・33)

と、ヨハネ伝で言っておられる。だから、クリスチャンはひるんではならない。盛んなる御霊の人として我々はこの世でキリストを証していく。それが我々のキリストに対するご恩返しです。では終わります。

## ● 祈り

一言だけ祈らせてください。

主さま、この第2回の集会もあなたが天国を味わせてくださいました。ありがとうございます。あなたが命懸けでもたらしてくださいました御国はこのように豊かな素晴らしい神の王国、霊の次元、およそこの肉の世とは全くちがう本当に天国そのものをあなたは私たちにくださいました。功なくしてあなたが道を拓き、

「我は道なり、真理なり、生命なり。誰にても我によらでは父の御許に到ることなし」

と。本当にその通りでございます。主さま、ありがとうございます。どうぞ、いつもいつもあなたと一緒に歩ませてください。感謝してこの祈りを兄弟姉妹の祈りと共に今、御前にお捧げいたします。アーメン。

